

第43回全日本中学生水の作文コンクール 入選

「世界の命を救う水」

佐賀県 佐賀市立北山中学校 二年 田中 美羽菜

長く続いた梅雨もようやく終わり、青空が広がっている毎日だが、令和二年七月豪雨は、九州、中部、東北地方をはじめ、日本の広い地域において、土砂崩れや河川の氾濫が相次ぎ、多くの死者を出した。人命や家屋への被害のほか、ライフラインや地域の産業等にも甚大な被害をもたらした。

私が住んでいる地域でも一日中雨が降り続く日は何日もあった。学校が休みになるなど、とても不安で怖い豪雨だった。大雨が降ると川が増水し、ダムに流れ込む。私の家の近くには、嘉瀬川ダムがあり、その様子を目のあたりにしている。いつも、何気なく目にする嘉瀬川ダムだが、自宅にあった「嘉瀬川ダム対策協議会記念誌」を読んで、調べてみることにした。そこには、次のような内容が記されていた。

嘉瀬川は、脊振山系に源を發し多くの支流を合わせ、佐賀平野を貫流して有明海に注ぐ、流域面積三百六十八平方キロメートル、流路延長五十七キロメートルの一級河川で、嘉瀬川ダムは、治水、利水及び発電を目的とした佐賀県最大の多目的ダムである。嘉瀬川では、過去に多くの洪水被害が発生しており、洪水調節機能が大きな柱となり、このダムは「百年に一度の大雨」に対応できることになっている。利水ダムの働きとしては、七市町へ供給する農業用水、佐賀市富士町へ供給する水道水、佐賀市、久保田町の工場へ供給する工業用水がある。また、発電は約五千世帯に電力を供給している。

私は、水の恵みによって、人々の生活が豊かになっていることを知った。しかし、この嘉瀬川ダムを建設するために、先祖代々長年住みなれた故郷を離れ、別の場所へ移転しなければならない人もたくさんいた。田んぼや畑、土地を持つている人々の家も、すべてがダムの底に沈んでしまっている。高い山はそのまま残ったが、見慣れた風景は変わってしまったと母は言う。とても寂しく、辛くて何とも言えない気持ちだった。

と思う。私の家の田んぼも、いくつかはダムに沈んだと、祖父母から聞いている。

ダムが完成するまでは、何十年もの年月を必要とした。地域の人々は、当然最初は建設に反対した。しかし、最終的には「五十年後百年後の子どもたちが、笑顔で暮らせるように」という思いで、建設が着工したと聞いた。今の自分の生活のことだけではなく、未来の子孫のことを考える。そのためには、「犠牲も仕方がない」ということがあったようだ。私は、百年先のことを考えた地域の人々の思いを受け止め、ダムを見ている。ダムに沈んだ地区に住んでいた人々や、ダム建設を計画した人々、工事をしてくださった方々。たくさんの人たちのおかげで大雨の日にも対応でき、水に不自由することなく生活できている。その方たちに感謝しながら、水を使っていることと改めて思う。

一方、世界に目を向けると、別の面が見えてくる。日本では、ごく当たり前に使用できている水だが、日本のように水に恵まれた国ばかりではない。逆に、日本の方が特別である。二〇一九年現在、世界では二十億人が、自宅で安全な水が手に入らない状況下にあると言われている。不衛生でも飲み水を確保するため、池や川へ汲みに行かなければならない。そのため、下痢や病気になり、命を落とすこともある。また、女性や子どもたちが水汲みの担い手となっている。子どもたちは、本当は学校に通い勉強をしたい気持ちがあると思う。

きれいな水が飲めないということは、衛生面でも教育面でも重大な問題となっている。改善するために、私たちに何ができるのだろうか。そのことを考えながら、水資源を大切に使うことが、世界の水問題を解決していくことにつながる。